

人文・ 社会系

大澤本源氏物語に 関する研究

財団法人逸翁美術館 理事 **伊井春樹**

研究の背景

源氏物語の本文は、昭和十年代に池田亀鑑氏によって青表紙本、河内本の二系統に分けられ、それ以外の本文のグループは一括して別本と称して処理されてきました。そのうちでも青表紙本が、藤原定家の書写本を継承するとして尊重され、戦後もそのまますべての注釈書、テキストにおいて採用されてきました。かねて、私は鎌倉期以降の注釈書類、本文を調査し、別本の意義を主張してきました。このたび、それが新出資料としての大澤本の発見ともなったのです。これは別本の本文を大量に含み、青表紙本とは異なる源氏物語の世界が展開しているだけに、きわめて意義のある存在といえます。

研究の成果

これまで交付を受けてきた科研費による研究において、さまざまな新資料の発見や新たな知見を明らかにすることができました。宮内庁書陵部蔵『源氏積』の紹介と詳細な考察、院政期に成立した源氏物語の最初の注釈資料で、従来の説を覆す成立過程の新説だけでなくに反響も呼び、第一回財団法人日本古典文学会賞を受けることになりました。その他、数々の資料の発掘と研究成果を得たと思います。近年では、個人所蔵の大澤本源氏物語の調査依頼を受け、それが別本の性格であるとともに、従来読みなれて来た青表紙本とは別の物語世界を持っていることが判明しました。たとえば、夕霧像が大澤本では異なるとか、浮舟の母親の行動など、定家本とは異なる別本の存在として2008年には新聞、テレビ等で大きく報じられ、宇治市源氏物語ミュージアムでは全巻の展示、これをめぐってのシンポジウムも開催されるなど、社会的にも大きな反響がありました。



今後の展望

今回の大澤本源氏物語の発見により、研究者においても、あらためて本文を見直す動きがあり、学界全体においても、基礎的な研究の重要性が認識されてくるようになりました。人文学はすぐに目に見える成果としては示しにくく、長い時間がかかります。地道な分野ではあっても、次の世代に文献調査の意義を継承していきたいと思います。また、これまでも科研費で取り組んできましたが、国文学を含む日本文化を、さらに海外の研究者と連携し、在外日本文献資料の発掘と、共同研究を推進したく思っています。

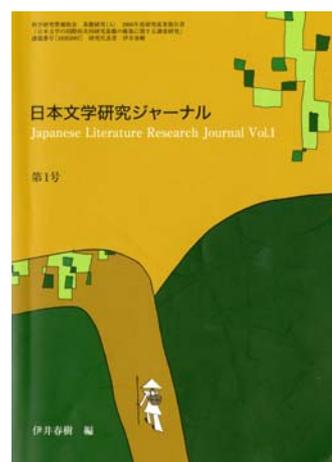


図1 科研費報告書「日本文学研究ジャーナル」表紙(2007年3月)以下、第4号は2010年3月に刊行予定。

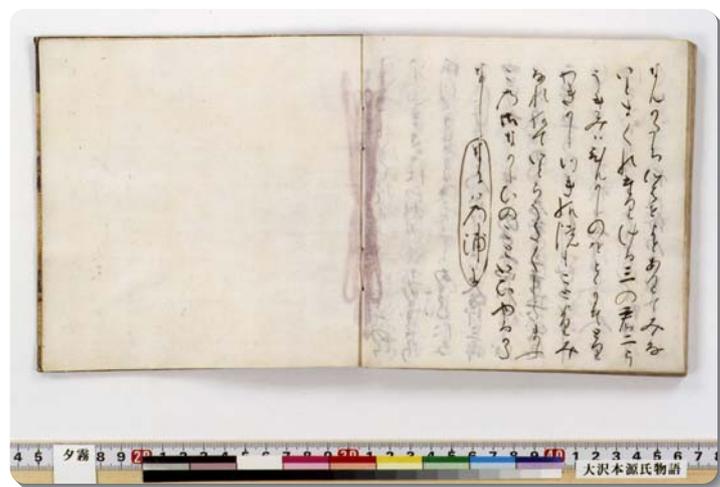


図2 大澤本源氏物語 夕霧巻末

関連する 科研費

平成12-13年度 基盤研究(C)「源氏物語本文及び注釈資料の体系的書誌調査と総合年表の作成」
平成18-22年度 基盤研究(A)「日本文学の国際的共同研究基盤の構築に関する調査研究」